

昔もいまも自主トレーニングは大好きな、森林公園で

2020年、高校野球における注目は、まぎれもなく愛知の中京大学附属中京高校にあった。

2019年秋、神宮大会で全国制覇を果たすと、選手の胸上げに高橋源一郎監督が舞った。中京大中京硬式野球部が胸上げをするのは、日本一を成したときに限る。「甲子園出場」ではなく「日本一」を求める名門のプライドだ。

神宮大会決勝に6回から登板したのが、尾張旭市出身・在住の高橋宏斗投手。先発の左腕・松島元希投手から引き継ぎ無失点に抑えると、マウンド上で大きなガッツポーズを見せ優勝を喜んだ。その後、「甲子園」がコロナ禍で中止となる度に仲間と新たな目標を定め、愛知県独自大会決勝では自己最速の154km/hを記録。8月の甲子園交流試合で公式戦28連勝、無敗を達成した。

高橋投手が野球と出会ったのは2歳のとき。母親と一緒に兄・怜介さんの練習について行ったのが始まりだ。「兄のプレー姿がかっこよくて、自分もこんなふうになりたいと惹かれました。兄は常に憧れの存在です」と笑顔を見せる。父親、怜介さんと愛知県森林公園に出かけては、練習を重ねた。

中学に入ると怜介さんも在籍した豊田シニアへ。当時の監督に勧められ、中京大中京への進学を決めた。「春夏合わせて甲子園優勝回数日」

「甲子園」が中止となりチームが目標を見失ったとき、印出太一前主将はチームの全員に声をかけた。「こんなところで終わるチームではない、自分たちは負けない」と、言動と行動でしめしてくれた。印出のチームだと実感しました。目標を「無敗」に定めると、一つの言葉のもと、チームの絆はより強く、なった。

甲子園交流試合、校歌を歌い終えると高橋投手は目に涙を浮かべた。1年間、本当に苦しかった。1試合ではあったけれど、目標としていた甲子園に立つことができ、「ベンチに入れなかったメンバーも含め、3年生全員で闘うことができた。1試合にかける思いや、すべての人への感謝を全身で感じ、感極まりました。甲子園は本当に夢のような舞台。球場に

巻頭特集 独占取材 三郷小・尾張旭東中出身 中京大中京から中日ドラゴンズへ!

高橋宏斗 投手

「アサヒセット」エリアで生まれ育った中京大学附属中京高校・高橋宏斗投手が、今季プロ野球ドラフト会議で地元球団から1位指名を受けた。高校野球の名門でエースナンバーを背負い、コロナ禍のなかで仲間とともに公式戦無敗を達成した2020年。1年を振り返りながら、地元への思いを聞いた。

本一の名門です。伝統と誇りがあり、緊張しました」と入部前を振り返る。野球の技術だけでなく、人間として成長できるのが中京大中京だという。「野球部は一目置かれる存在。目配り気配りができるようにになりました」と3年間の成長を実感している。

愛知県独自大会以降、高橋投手は登板する度、マウンドに「心」の文字を書いてきた。自粛期間中、仲間と練習ができず改めてチームの存在の大きさを感じた。学校のグラウンドに戻ったとき、仲間と「心ひとつに目標に向かおう」と誓い、始めたことだ。

「死に物狂いは一生懸命を圧倒する」。野球部のトイレには、部員が書いた言葉が掲示されている。



怜介さんと宏斗投手。野球に出会い、兄弟と一緒に練習を始めたころ。「自分は思い立ったらすぐに行動するタイプで、兄はしっかりと計画を立てて行動するタイプ。まったく違う人間ですが、見習うこと、教えてもらうことは非常に多い」と話す



いまも兄弟仲が良く、神宮大会優勝を心から祝い自粛期間中も相談に乗ってくれた。プロ入りを一番喜んで一人

死に物狂いは一生懸命を圧倒する

「死に物狂いは一生懸命を圧倒する」。この言葉がチームを鼓舞し続けた



この手の平から、自慢のストレートが放たれる。印出捕手のサインを信頼し、一切首を振ることなく投げ続けた

立ったとき、圧倒的な雲間気圧に足が震えたのを覚えています。夢を届けて、夢を与えてもらえる場所。ぜひ後輩にもあの迫力を感じてほしい」とエールを送った。

「野球から離れて一人の人間として自分を見たとき、社会で通用する人でありたい」という。そしていま、高校生からプロの選手へとステージを上げる。

野球が上手になりたい!! 地域の子どもたちから質問 教えて! 高橋投手!

Q 中学生のころは、どれくらいご飯を食べましたか? A 中学時代は体が細くあまり食べられませんでした。食事に対する意識もなかったのが当時から今のような栄養を気にした食事をしていたら、もっと大きな体になれたかなって思っています。1回でとれる量が人より少ないので1日に6~7食に分けてたくさんとるようにしました。お餅やパン、ドーナツなどを食べることも多いです。

Q 野球の上達のために、どんなトレーニングをしていますか? A 探究心を常にもっています。どうしたらうまくなるか考えるだけでもいい。インターネットに上がっているトレーニング方法を試してみるなど、面白半分でも取り組んでみるのが大事。そこから自分に合う方法を見つけています。

Q プロになりたいって思ったのは、いつ? A 中学3年生です。豊田シニアで全国大会に出場しました。結果を残すことができ、やるからは日本一になりたい。高校やその先を考えると日本一を経て最高峰であるプロ選手になりたいと思いました。

Q 「9回裏、1-0、2アウト満塁」のとき、どんな球を投げる? A 一番自信のあるストレートです。困ったときにも頼る球です。自分の軸にしていかなければいけないと考えて、瞬発力を鍛えてストレートの球速・球質をあげてきました。

Q 「これだけは負けない!」ということはある? A やはり野球に対する探究心は人一倍強いんです。今でも目標とするプロ選手のピッチングを朝の通学時に動画で見て、練習時に試してみ、帰り道で復習をする、を繰り返しています。

Profile 高橋宏斗 投手

2002年8月9日生まれ。三郷小2年から三郷ファイターズで野球を始める。尾張旭東中では豊田シニアでプレー。中京大中京高で1年夏からベンチ入りし、2年春からエース。最速154キロ。右投げ右打ち。184センチ。森林公園は、いまでも身近で「自粛期間中は、毎日、自宅から走って行きトレーニングをしていました。緑が多くて、走っていて気持ちがいいし、子どもたちから大好きな場所です」と話してくれた

